

犬の陰囊における肥満細胞腫の病理組織学的グレード分類と予後

○長峯栄路

サンリツセルコバ検査センター

【はじめに】

肥満細胞腫は犬で最も発生が多い皮膚腫瘍であり、発生部位が予後の推測に重要であると報告されており、病理組織学的グレード分類は最も有用な予後因子である。実際に用いられているグレード分類は2つあり、組織学的特徴を判断基準にする Patnaik らの分類（Grade I～III）と細胞形態を判断基準とする Kiupel らの分類（低グレード、高グレード）がある。また現在までに犬の皮膚肥満細胞腫の予後に関する報告は多数なされているが、包皮、鼠径部、会陰部、爪床領域の腫瘍は他の部位のものよりも侵襲的な挙動を示すとする報告や、鼠径部、会陰部の肥満細胞腫は他の部位の肥満細胞腫とほぼ同様の予後を示すとする報告が複数あり、さらなる検索が必要であるとの指摘がある。そこで今回、犬の陰囊に発生した肥満細胞腫の組織学的特徴、組織学的グレード分類、予後について回顧的に検索した。

【材料と方法】

2014年9月～2018年2月の間にサンリツセルコバ検査センターで、陰囊に発生した肥満細胞腫と病理診断した症例のうち、組織診断後の予後追跡が可能であった犬18例を対象とした。送付された組織は、10%ホルマリンにより固定後、定法により標本を作製し、ヘマトキシリン・エオジン染色で染色。現在、広く利用されている Patnaik らおよび Kiupel らの提唱する2つの組織学的悪性度評価法を用いてグレード分類を行い、予後との関連性について検討した。

【結果】

Patnaik らの分類では、Grade II : 55% (10/18)、Grade III : 45% (8/18)となり、Grade I に分類された症例はなかった。Kiupel らの分類では、低グレード : 33% (6/18)、高グレード : 67% (12/18) に分類され、grade III の症例はすべて高グレードに分類された。18例全症例の生存期間の中央値は436日（範囲、60～1031日）となり、Grade II では710日（範囲、107～1031日）、Grade III では217日（範囲、60～448日）、低グレードでは710日（範囲、436～936日）、高グレードでは285日（範囲、60～1031日）であった。Kaplan Meier 法、ログランク検定による統計学的解析により、生存期間はグレード III および高グレードの症例がそれぞれグレード II および低グレードの症例よりも有意に短い結果となった ($P < 0.05$)。鼠径リンパ節への転移あるいは遠隔転移への転移が認められたのは3例で、Grade III / 高グレード2症例と Grade II / 低グレード1例であった。c-kit 遺伝子変異解析が実施された症例はなく、術後にプレドニゾロン、ビンブラスチンを投与された

症例が5例みられたが、非投与群との明らかな生存期間の有意差は認められなかった。

【考察】

今回検索した犬の陰嚢に発生した肥満細胞腫の病理組織学的グレード分類の結果は、現在までに報告されている陰嚢以外の皮膚肥満細胞腫と比較して、明らかにグレードの高い症例が多く生存期間も短い結果となり、陰嚢に発生した肥満細胞腫は予後には注意が必要であると考えられた。術後経過の追跡日数が短い症例もあったため、今後もより長期的な検索、データの蓄積が必要であろうと思われた。